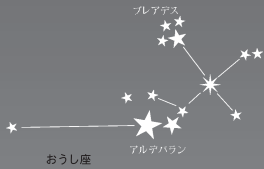


ポラリスを仰ぐ北の大地から



北海道命名150年

夕張市医師会 会長 中條 俊博

北海道の6月は1年で気候が良く初夏、気分が良い。今年、2018年北海道は命名150年とのことで道内でも各種企画、イベントもあり、にわかに盛り上がってきているようだ。

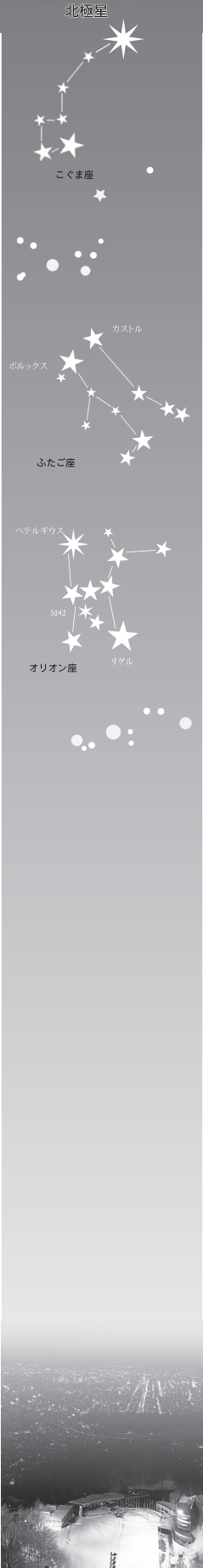
北海道は縄文文化やアイヌ文化をはじめとする本道独自の歴史や文化があり、世界遺産となっている知床半島など自然環境は世界にも誇れる。

本道はかつて「蝦夷地」と呼ばれていたそうで、1869(明治2)年8月15日に松浦武四郎が“北海道”と命名したと言われている。この松浦武四郎を調べてみると松阪牛で有名な三重県松阪市出身らしく、あの伊勢にも近いところ。若い時から旅が好きであちこち行った中、江戸時代ロシアに狙われていた蝦夷地に入り、10年ほどで6回も探査し多くの報告書、地図をまとめ世に示したそうで北海道の救世主のような人物と言っても良いかもしれない。

明治に代わり蝦夷地の一番詳しい人物として明治政府の一員、開拓者の役人として蝦夷地に代わる名称を明治政府に提案したようで、候補が「北加伊道」「日高見道」「北海道」「海島道」「東北海道」「千島道」の6つ。最終的には「北加伊道」の加伊が海になって北海道になったようだ。海北海道も3字は一緒であるがどれも冴えない感じがし北海道で良かった。

松浦武四郎はアイヌの人々と交流を深めたそうで、カイという言葉にはこの地で生まれたもの、という意味がありアイヌの人々への想いも込められた命名であったようだ。その後70歳で富士山へ登頂するなど71歳で亡くなるまで旅へ執着した人生だったようだ。

ところでこの夕張も1888年、元ライマン調査隊隊員の坂市太郎(ばんいちたろう)により「石炭の大露頭」が発見され130年の節目。そして北海道命名150年という節目に夕張市石炭博物館がリニューアルオープンした。「汎用性の高い博物館、未完の博物館として、短いスパンで展示品を変えて飽きさせない展示にしたい」と鈴木市長も絶賛する。ぜひ時間があれば夕張に足を運んで夕張の歴史をみてほしい。



統合型リゾートIR (integrated resort) と医療界

三笠市医師会 会長 川崎 君王

IR推進法が2016年に成立、その実施法案が2018年6月に衆議院を通過した時点で文章を書いている。このIRが現実になると危惧されているのが併設されるカジノである。ギャンブル依存症が問題となる。想定されるデメリットのギャンブル依存症について考える前に、想定されるメリットを挙げてみる。国内外からの観光客の誘致、カジノ税収入による新規財源の創出と言われている。

カジノは何かを生産して収益を得るのか。一般的には街示的消費をするのみである。しかしカジノに参加する人は、すべてがカジノで現金を失っても何も生活上問題に至らない人々ではないことは明らかである。上場企業の創業者一族であっても、ギャンブルが高じて特別背任行為で収監に至ることも報道されている。

次にデメリットについて考えてみる。そのデメリットをギャンブル依存症問題と一括りにしているが、一言で表現でき得るような簡単な事柄であろうか。

その前に類似した歴史を見てみると、人類は新大陸の発見に伴いタバコを手に入れて、喫煙習慣が広まり、その害に苦しめられてきた。火の使用に関連して火災に伴う家財の喪失。我々医師との関連では健康被害で悪性疾患発症との関係性、動脈硬化に伴う血管障害、タバコの煙に伴う呼吸器障害等に膨大な資金を投入して、21世紀に入ってから受動喫煙を含めた被害を的確に明らかにしてタバコが持っているデメリットを世に知らしめてきた。タバコの販売に伴う利益を上回る資金を投入してデメリットと向き合い対策を講じてきた。

ギャンブル依存症に関しては本邦ではパチンコ産業との関連において知られてきている。この疾患の対応は主に精神科医が担ってきている。1970年代に本邦では公営ギャンブルの廃止が論議されていた。その当時東京都の美濃部知事が公営ギャンブルの負の面に言及して「ギャンブルに溺れた家族を省みない父親が普通の生活に戻るようにと、幼い子供が神社に手を合わせていた」との話を交えて人の不幸から生み出される金銭からなる地方財政は公序良俗に反する。と言って、東京都主催の競輪等の公営ギャンブルを廃止にしてきた歴史がある。

ギャンブルに溺れる者はギャンブル依存症に罹患していると判断することは、容易なことかもしれない。それから派生する全ての課題を想定し対策を講じることは容易でないことが想像される。

お金が全ての大きな世の流れの付回しに対して、医療界がまた対応して社会に向かって応えていかなければいけない使命を負うのか。